

と、いう事で流太郎の脳の一部は人工知能と入れ替えられた。

医者は、その場の助手達に、

「手術は成功だ。営業に必要な会話が数千万は組み込まれた会話を記憶する人工知能を移植したんだ。日本初、いや、世界初だ。これで彼も、仕事が上手くいくだろう。」

そう話すと医師達は手術室を出て行った。

一か月後に退院した流太郎は会社に電話すると、社長の靱山は、

「一か月も休んで、何をしていたんだ?」

ガンガンと大声で聞いてきたので、

「人工知能を入れてもらっていたんですよ、ぼくの脳に。」

と流太郎が答えると、靱山は、

「ほおう、そういう手術があるのか。詳しい話は会社で聴こう。今から出てこい、な?」

「はい、只今から出社します。」

と答えてスマートフォンの時計を見ると、午前十一時だった。

楽しい出勤だった。地下鉄の中は人が少ないし、脳の中は何か変わったような気がする。地下鉄のアイランドシティ駅を出ると、歩いてすぐのビルに株式会社夢春はある。マザーズに上場しているが、有名ではないのはサイバーセキュリティ

ィの会社が広く一般に知れ渡ることも、ないからだろう。それでも上場企業は株主様のために進歩する必要がある。

そのために、営業は特に必要とされるのだ。いくら技術があっても、人に知られなければ、何の売り物にもならないからだ。

夢のような春を株式会社夢春は目指している、と、かつて社長の昀山は流太郎に話したことが、あった。

と、こうも、ああも思っていると、もう会社のビル。玄関に入り、エレベーターに乗ると、気が付けば流太郎は社長の昀山の方に歩いているのだった。

異次元感覚は脳の、せいか?昀山の声が、

「おはんにちわ。もう昼前だし、おはようと、こんにちわ、だ。脳の手術を受けたのか。どうだ?調子は。」

「すこぶる快調です。営業脳を移植してもらいましたよ。」

「それなら期待できるなあ。さっそく営業に出てもらいたいんだ。福岡市内の会社も、ようやくサイバーセキュリティの重要性に気づき始めたらしい。だから顧客は容易に獲得できる。そこでだ、今回の営業先だが、店舗を持たずに商品を販売している会社に行ってもらおう。ネットショップだよ。行先は、ここ。」

と昀山は名刺を流太郎に手渡した。

株式会社 トイザマス 技術部長

尾茂茶瓜子

福岡市東区アイランドシティ・ハイランドタワービル

というのが、その名刺だった。流太郎は、
(おもちゃ・うりこ、と読むのだろうか、この名前は。)と
思いつつ、

「それでは、行ってきます、社長。結果は素晴らしいものに、
なりますよ。まるでタヒチの空の海のように。」

と言葉を投げかけると出かけて行った。

それを聞いた靱山は、
(ほうう、少し語彙が豊富になったようだな、時は。手術の
効果が出ている・・・みたいだなあ。)
と感心していた。

トイザマスという会社も、株式会社夢春と同じ人工島内にあ
る。ハイランドタワービルの一階が一般的な玩具売り場で、
地下一階が大人のおもちゃ売り場だった。地下一階の店の奥
に、トイザマスの営業本部や業務部、総務部、そして社長室
などがある。

大人のおもちゃ売り場の入り口から入ると、店の奥に流太

郎は進んだ。バイブレーター、オナホールなど、大人のおもちゃが行列のように並んでいる。実店舗の大人のおもちゃの店は無人店舗である場合もあるが、ここは有人のようだ。しかも、若い女性が店員として立っている。客も午前中というのに、かなりいる。大半は年金暮らしの老人だ。それも一人暮らしの男性老人が最先端の大人のおもちゃに目を光らせている。

まるで老人のおもちゃ、の店であるかのようだ。立体映像のDVDの売り場には、多くの老人が立っていた。その一角には大型スクリーンが実物大のアダルト映像を流している。それを数十人の男性老人が取り囲んで見物している。一人の老人が声を上げた。

「すごいなー。まるで目の前で、やっているようだよ、この男女。」

別の老男子が、

「女性器丸見え。でも海外ものには見えんなあ。」

その時、風のように飛んできたのが女子店員だ。映像機の横に立つと、

「みなさん、立体映像を御覧いただき有難うございます。この映像は立体に見えるものではなく、本当に立体化しているのです。実際に映像の画面は平坦では、ありません。スクリ

ーンから映像が浮き出ています。横から御覧ください。」

と解説した。老人男性一同は、スクリーンの真横に移動して見ると、確かに映像は裸の男女を立体に映している。素晴らしい映像技術だ。美人の若い女子店員は続けて、

「これだけではなく、もっと凄い機器もありますよ。」

と話すと、老人男性たちは、

「どんなものだい。見せてくれよー。」

「もっと凄いつて、どこが？」

「あんた、もしかしてアンドロイド？」

と口々に声を出した。

女子店員は、

「わたしはアンドロイドでは、ありませんよ。新製品は AV メーカーと提携して作られました。こちらです。」

と話して、スクリーンの隣にある大型映像機を細く白い右手で示した。

その機械の画面は高さ二メートル、幅も二メートルの巨大画面だ。これなら実物大の人間が映るだろう。

奇妙な事に、その画面の真ん中より少し下の辺りに何と!オナホールが、あるではないか!

それ以外は電源の入っていない暗い画面だ。流太郎もの老人たちの、すぐ近くで、その新製品の機器と美人店員を見た。

美人店員は、その機器の電源ボタンを押して稼働させたのである。

映像は全裸で立っている AV 女優を実物大で映した。彼女の股間は黒い茂みの下に女性器が男性器を受け入れたさそうに待ち構えている。

その AV 女優が画面の中央に移動すると彼女の股間の位置はオナホールが隠す形になる。そのオナホールは・・・女子美人店員が、

「このオナホールは、今、画面に映っている AV 女優の女性器から形作られたものです。表面的なものではなく、このオナホールには奥行きがあります。画面の内部に埋め込まれているのです。」

老人達は、

「ほー。それは、いいな。」

「ほんとにな。この AV 女優と本当に、やっている気分になれるぞ。」

と感心する。彼らの中にはズボンの股間を少し、膨らませた者もいた。美人店員は笑顔で、

「どうですか、みなさん。試してみませんか。実際に嵌められますよ。」

と勧める。老人たちは皆、照れて、

「そんな事、できるほど若くないよ。」

「若くたって、こんなに人が、いるじゃないか。やりかねるよ。」

美人店員は流太郎に気づくと、目をパチリとさせて、

「そこにいる若い男性の方、やってみませんか？」

と明るい声で誘いかける。

老人連中は自分たちの後ろにいる流太郎に気づくと、

「おー、若い。もうチンコ立っているんじゃないか？」

「そうだ。若い兄ちゃん、やれよ。タダなんだろう、店員さん？」

と言うので紺色の制服を着た若美人は、

「ええ、もちろん無料ですよ。そこの方、AV 出演の経験が、おありのようですが。」

凶星、だった。でも、流太郎は、

「いえ、仕事で来たんです。御社の技術部長と、お話しするために、ですよ。」

と抗弁すると美人店員は、

「技術部長の尾茂茶で、ございますね。今、連絡を取りますわ。」

と話すとスマホを取り出して番号を押した。

「あ、尾茂茶部長。売り場の色毛です。今、新製品のモニタ

一をしてもらいたい男性が現れまして。で、その方は今日は仕事で、ここへ来たそうです。尾茂茶部長と営業の話があるからと断られました。尾茂茶部長、構いませんよね?この方にモニターに、なっていただいても。」

尾茂茶部長の声は色毛という美人店員にのみ聞こえる。

「わたしに社用で・・・と、時さんという人が来られる予定だわ。その方は、時さん、じゃないかしら。」

美人店員の色毛は流太郎を見ると、

「時さんという、お名前でしょうか。そちらの方。」

と訊いた。

流太郎は、うなずくと、

「ええ、時・流太郎といいます。」

色毛はスマホに、

「時さんだそうです。部長との時間は大丈夫ですか。」

「あ、大丈夫よ。サイバーセキュリティは我が社では急を要さない。そこでモニターをした後で来ていただいても、いいわよ。」

と明るい三十代の女性の声が答える。色毛はニンヤリとすると、

「時さん。大丈夫だそうです。モニターをした後での面談という事で。」

「そうですか。いや、でも、みなさん、いらっしゃいますから……。リオのカーニバルよりも熱い、この場で、なんて。」

老人たちは、

「恥ずかしがる事は、ないよ。」

「そうだ、そうだ、ここでモニターをやる方が、この会社の君に対する印象も、よくなるぞ。その後で営業をすれば、いい。」

と、もっともな意見に流太郎は、

「そうですね。営業前の別仕事、って感じですか。八月の太陽のもとで裸になる気分です。赤裸々なモニター、赤裸々お、って気分ですね。」

老人の一人は、

「前口上は、もういいから。さっさと脱ぎなさい。」

と重い一言に流太郎は、

「はい、脱ぎます、やります、モニターします。略して頭文字で NYM!」

と答えると手早く服を脱ぎ全裸になった。それを見た色毛は、ぱっ、と思わず両手で自分の目を隠したが、すぐに外すと、

「さあ、大画面の前に、どうぞ。」

と右手を前に出して勧める。

流太郎は大画面に接近していき、映像の av 女優は立って両

腕を抱いてほしいように差し出している。画面に静止したままだ。それに最接近した流太郎は激しく陰茎を屹立させた。両膝を曲げて、又、伸ばすと流太郎のモノは AV 女優の股間にあるオナホールに入っていく。

すると AV 女優は画面の中で、それを感じているかのような表情になった。観衆の老人たちは、

「おおっ。」

と声を上げる。

「まるで若い男とセックスしているような顔を始めたぞ。」

「兄ちゃん、腰を振れようっ。」

「激しく、腰を動かしてっ、それえっ。」

老人の囁し立てる声を聴いて、流太郎は腰を振ってみた。その腰の動きにつれて締りに強弱をつける av 女優のオナホール。それと同時に画面の av 女優も快楽を感じている顔になる。つまり画面の av 女優は流太郎の腰の動きに反応しているから、過去に撮影された映像ではないのだ。現在の動きに反応して快感を顔に表す、などは凄い技術である。流太郎は何度か射精しかけたが、それを止めて十分間、腰を振って動きを止めて硬直したままの肉竿を抜いた。老人たちは、

「おーい、もう、やめか。」

「もっと、もっと、突きまくれよー。」

と声を上げたが、流太郎は観衆に尻を向けたまま、素早く下着と服と背広を着ると、くるりと姿勢を老人に向けて、

「それでは、みなさん。失礼しまーす。後は、みなさんでav女優と楽しんだら、どうですか。オナホルの締りの強弱感が絶妙ですよ。八月の太陽の光と五月の爽やかな微風のような体験が出来ます。」

と言うなり、鮮やかな足取りで、その場を去った。奥の部屋の壁に行きつくと、一つのドアが

社員以外の立ち入りは出来ません

と表示されていた。

そのインターフォンのボタンを押すと、

「はい、技術部です。」

と若い女性の声がしたので、流太郎は、

「こんにちわ。サイバーセキュリティの件で、お伺いしております、時と申します。」

答えると、

「ドアを開けますので、お通りください。」

スルースとドアが開く。

中に入った流太郎は、そこに三十代の眼鏡を掛けた白い上着に灰色のスカートの女性が立っていて、

「ようこそ、時さん。技術部長の尾茂茶です。面談室に入り

ましょう。」

と話した。時は喫煙室よりも広い面談室に尾茂茶部長の後から、ついて入る。テーブルをはさんで二人は向かい合って座ると、尾茂茶部長の目がキラリと輝いた。彼女は微笑すると、「うちも顧客が増えてきましたのでサイバーセキュリティが、とても必要になってきました。

それで、そちらのセキュリティー技術で、お願いしたいと思っていますのよ、もう、そう決めましたので、話さなくても結構です。」

営業話術は要らないのか、と流太郎は思いつつも、

「なぜ、そう決断されたのでしょうか？」

と小刀急入で聞いてみる。尾茂茶部長は、

「それはね。さっきの貴方の行動ですよ。うちの最新鋭のav オナホールに果敢に挑戦してくださった、その熱意を見ると、その会社が分かります。それに、しっかりと勃起されていたしね。銀行でも太古から『朝マラ立たぬ者には金を貸すな。』と言うくらいですし。

だから商談無用ですの。」

なるほど、そういう事か、と流太郎は思った。しかし、何か言わなければ。で、

「もう収穫の済んだ十月の空に残る強い日差しを感じる気

がしますが、私として、これで貴社との契約を終え、帰社できます。後で社長の昀山が BDF(ビジネス・ドキュメント・フォーマット「註・株式会社・夢春で開発されたもの。」) ファイルを送りますので、それに記入してください。」

と今後の手続きを説明した。尾茂茶部長は生真面目な顔を緩めると、

「そのファイルは社長に社内のパソコンで転送しますよ。契約が早く終わったから、貴方には時間があるわね。開発中の我が社の商品を見て欲しいのよ。ぜひ、見ていってもらえませんか。」

「ええ、喜び勇んで見させてもらいます。今日は一日、契約の為に時間を取ってもいい、との社長の指示でしたので、十一月の太陽が姿を消すまで、でも構いません。」

「よかった。それでは、ついてきて下さいな。」

面談室を出ると、彼らは別の部屋に入った。その部屋は広くて複数の男女社員が商品の開発や点検をしているようだ。大人のおもちゃ、も大小取り混ぜて並んでいる。大きなモノとしては椅子やソファ、小さなものは小型ローターなどだ。

尾茂茶部長は流太郎を案内しつつ、説明する。円形の置物に人間の両腕のようなものが付いている機器が、あった。それを指さしつつ尾茂茶は、

「これはパイズリ・マシーンです。今は一番、その高さを縮めていますが、上に伸ばせば高さは二メートルにもなります。やってみますわね。」

尾茂茶は、その機器の円形の部分にある一つのボタンを押した。すると、スーッと縦長の竿みたいなものが、それに付いた両腕と共に上に伸びていき、両腕の位置は一メートル五十センチほどの高さになる。

尾茂茶部長は別のボタンを押した。すると、たちまち二本の手は女性を背後から抱くような形になると、次に乳房を揉むような手になると、実際に豊乳を揉むような動きを始めた。なるほど、パイズリ・マシーンだ。流太郎は感嘆の声で、

「すばらしい!これは、まだ研究開発中ですか?」

と尋ねると、尾茂茶部長は、

「そうね、今、色々な生身の女性を使って研究中ですけど、簡易版は安い価格でネット通販に出しています。BOPIS で買う女性が多いのよ。」

「BOPIS・・・?」

「バイ・オンライン・ピックアップ・イン・ストアの英語の頭文字を採ったものね。オンラインでネットで買って、コンビニのような店で受け取るという形の事。」

「ああ、日本でも店置きとかいうアレですね。あれなら女性

にも買いやすいでしょう、大人のおもちゃは。」

「それで簡易版では満足されない御客様が増えてきたのよ。もっと性能のいい高級な、大人のおもちゃが欲しい、と。」室内に若い女性の悶えるような声が響いた。

「あ、ああ一つ、あん。」

流太郎は思わず声がした方を振り向くと、椅子に座った上半身全裸の若い女性が、パイズリ・マシーンに後ろから、ふくよかな白い乳房を揉まれているのだった。流太郎は慌てて顔を尾茂茶部長に戻す。尾茂茶部長は眼を細くして、

「ああやって、うちの研究員が自分の体でパイズリ・マシンの性能向上を実験して研究しています。時さん、あなたはAVに出演した経験が、おありのようだけど。」

と話した。流太郎は耳に、さっきの女性が、

「ああん、ああん。」

と、すすり泣く様な声を出して感じているのを聞きながら、

「ええ、ありますよ。あくまでも副業として、ですけどね。」

尾茂茶部長は深く、うなずくと、

「副業が本業になる人もいますよ。」

と意味ありげな言葉を口にする。続けて尾茂茶部長は、

「うちでも男の研究員は必要です。」

「どういう意味で、ですか。もしかして、この私を・・・。」

「パイズリ・マシーンは機械ですわ。人間の男の貴方に研究員の若い女性の胸を揉んでもらって、その感覚をパイズリ・マシーンの手の感触と比較してもらうとか、必要になります。よろしかったら、時さん、どうですか。もちろん報酬は差上げます。若い女性の乳房を揉んで、お金が貰えるなんてAV 以外には、ないと思いますわ。うちの会社はAV よりも高い報酬にします。どう？」

なるほど、いい仕事だ。しかし、それに、のめり込むと本業が疎かになりは、しないだろうか。流太郎は、耳に時々、聞こえてくる若い女性の研究員がパイズリ・マシーンに乳房を揉まれて悩ましげな声を上げるのを聞きつつ、

「考えさせてください。お返事は、そのうちに、します。」と返事をした。

尾茂茶部長はニッコリすると、

「ここ以外の場所でも他の製品の研究は進んでいます。少し歩きましょう。」

次の場所では机に座った女性研究員が小さな小指の先ほどの物体を、いじって調整などをしているようだった。

尾茂茶部長は、その女子研究員の傍らに立つと、

「静野(しずの)さん、開発商品名「JV」はテストで使われていますが、その結果は良好ですよ。」

と話しかけると、その研究員の静野は顔を上げて尾茂茶部長を見ると、

「よかった。こんなに小さいのですもの。わたし、自分でも試しましたし、気づかない位でした。」

と喜んで話す。流太郎は分からないので、

「尾茂茶部長、何の話か分かりません。よろしければ、説明してください。」

と云うと、尾茂茶は流太郎の方を向き、白い研究服の背を伸ばすと胸を張り、

「よろしい。話しましょう。実は我々は隠密な行動を取る仕事も依頼されます。その中には対立する企業を潰す、というものも、あるのです。具体的な会社名などは申し上げられませんが、こういう事です・・・・・・・・

某大企業のビルの一階には受付の女子社員だけが長い時間を、そこで待機している。

そこに対抗企業の依頼したカメラマンが、指定された時間に遠くから望遠レンズのカメラで、受付の女性(もちろん、若い美人)を動画撮影し始める。その会社は、あらかじめ訪問者の時間を受付の女子社員に知らせているから、いつ来訪者があるかを受付の女子社員は知っている。

その時間まで、二時間は誰も今日は来ないのだ。

受付の女子社員は座ったまま、ぽーっとした目で会社の壁を見つめていた。すると、いきなり彼女は、

「あっ、はあっ、」と、声を出してしまい、思わず口を手で押さえた。

彼女の股間には超小型のバイブレーターが白いパンティの上で振動を始めていた。それを指で確認した彼女は、

(なによ、これ?こんなもの、下着のアソコに着けたりしないのに。)と訝しがったが、心地よいバイブレーターの振動は彼女の淫部に伝わってくるので、又、思わぬ嬌声を上げないとも分からない。それで彼女は口に手を当てて、両脚をモジモジさせながら女子トイレに駆け込むと、個室に入り、股間を探った。ブーン、ブーンと心地よい振動がするので彼女は口を抑えて、快感の声を漏らさないようにした。すぐ外さなければ、このバイブレーターを、と思いながらも二十分は、それをつけたままにして彼女は快感を楽しんだ。それから、それを股間の下着から外すと、まだバイブレーターは動き続けている。

どうやって止めたらいいいのか、彼女には分からない。スイッチも見当たらない。ゴミ箱もトイレの中にはないので、彼女は便器の中に、その動き続ける超小型のバイブレーターを捨

てると、水で流してしまった。

何もなかったような顔をして受付に戻ると、彼女は椅子に座った。

会社内の誰にも彼女の行為は、ばれなかった。ほっとして帰宅した独身の彼女はワンルームマンションの部屋でパソコンを起動させる。YOUMANKO を帰宅後に第一に閲覧するのが習慣となっている。それを見て、彼女は驚いたのだ。